小林勇文集

第一卷

筑摩書房

小林勇文集　第一巻

一九八二年十一月二十日　第一刷発行

著　者　小林　勇

発行者　布川角左衛門

発行所　筑摩書房

101東京都千代田区神田小川町二ノ八

電　話　〇三(二九一)七六五一営業部

〇三(二九四)六七一一編集部

振　替　東京六-四一二三

印刷所　精興社　製本所　鈴木製本

乱丁・落丁本の場合は御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

Printed in Japan 1982　　0395-72501-4604

目次

遠いあし音　1
彼岸花　97
＊
御病室にて　299
露伴先生の将棋　321
三木清を憶う　324
「赤彦全集」と藤沢古実　326
全集問答　331
茂吉と茂雄　336

遠いあし音

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

孤独のひと

——三木清の一周忌に——

太平洋戦争の初期、勝った勝ったで騒いでいるころ、高円寺の三木家の庭にはもう立派な防空壕が出来た。三木さんはそれへ私を案内した。中に入って見ると、円筒形になっていて、両側に腰かけがとりつけてあった。二人はそれに掛け、私は何か冗談をいって冷かした。その後、壕の上の小山には芝生が植えられ、薔薇の花やチュウリップなどが美しく咲いた。三木さんはたびたび君も防空壕を作れとすすめた。そのたびに私はこれが腐るころになったら作ろうと応酬した。

ものごとに対する三木さんの見通しはいつでも早かった。われわれが集まって放言している時には、遠い将来に起こり得る事柄があたかも目前に迫っているかのようになることが多かった。そういう時「十八番がはじまったぞ」と誰かが止めをさすようにいい、皆で大笑して終りになった。

日華事変はますます泥沼へ踏み込んだようになり、欧洲に戦争がはじまった。三木さんのヒトラー嫌いは一層烈しくなり、独ソ戦がはじまるとそれは一層強くなっていった。「ヒトラーは自殺する。近衛には剣難の相がある。」折あるごとに三木さんは大声でこの言葉を放り出した。

独ソ戦が進んで、その秋にはレニングラードの陥落が迫っていると毎日大きく報ぜられていた。私

は或る夜、酒席でレニングラードは陥ちないと主張し、席にいた全部の人と賭をした。負けた者が一杯おごるという程度の賭であったが、相手の一人だけは金持であったから私が負けたら五十円出し、勝ったら五百円とるということにした。二、三日のちに三木さんが店へやって来た。私はいきなり「レニングラードは陥ちると思うか」ときいた。三木さんは予期した通り言下に「陥ちるもんか」と返事をした。私は先夜の賭に保険をつけるといういたずらを三木さんを相手にしてやろうと考えていた。「君はどう思う」と三木さんがたずねたとき「陥ちると思うね」と答え、予定通り五十円宛の賭を結んだ。それから先夜のことを話して保険をつけたのだと白状し、ぼくはどちらにしても損はない。うまくゆけば四百五十円は儲かるからねとからかった。しかし三木さんはそんなことは委細かまわず、自分が絶対に勝つと主張して上機嫌だった。

昭和十六年の十一月某日と思われる。三木さんは私たちの室へ入って来た。「いま二階で高坂と議論して来た。あの連中もさっぱりわからないね。僕が日米戦争不可避論をしても、どうしても反対するんだ」といい、「駄目だなあ」といつもあきれたときに使う癖の言葉を出した。ひと月たたぬうちに三木さんの説は勝った。

十七年の一月終りの或る日であった。九時少し過ぎに店へいって見ると、もう三木さんが来ていた。こんなに早くいったいどうしたのだときくと、いつもと変った顔で黙って小さな紙きれを出した。それは徴用の命令書だった。三木さんは昨夜どこかの座談会に出て「徴用するなら、ぼくのような有能の者をしなくては駄目だ」など冗談をいったという。夜更けて家へ帰って見たら、令書が来ていた。珍しくこんなに早く出て来た理由がわかった。「徴用のちょうの字に『心』がつかなくてよかった」

など冗談をいっても、三木さんはいつものようには酬いなかった。三木さんが軍刀の用意をしなくてはならぬ。これはおよそ奇妙な感じであった。三木さんは帰りがおそくなることを心配して娘さんの女学校も定めて置きたい。ついては自由学園に入れてくれるよう羽仁に頼んでくれということだった。用意などで忙しいだろうと思うのになかなか帰らなかった。数日後の早朝、私たち数人の者に送られて竹橋の兵舎の門を、火野葦平とともに入っていった。その日の午後、品川御殿山の岩崎邸に移った。面会にゆくと、同じ日に徴用された人々がおり、その面会人がたくさん来てごたごたしていた。広い庭の片隅で冷たい風に吹かれながら話した。すぐにも南方のどこかへ出発するらしいという話だった。

しかし三木さんたちの出発はおくれた。はじめ外泊は許されなかったが終には一泊を許された。結局品川に一ヵ月近くの長滞在になった。その間に三木さんは「脱走」と称してたびたび遊びに来た。酒をのみにも出かけた。一緒の者は全部戦争反対であり、敗けることを信じ、情勢は自分たちの明日について愉快な想像をしない者ばかりであった。酒に酔って誰にも文句をいわれないために軍歌を大声に唄った。しかしその軍歌の文句に妙なアクセントを意識してつけた。三木さんは、十八番の愛染かつらを歌った。親しい人たちに寄せ書をした。京都の西田幾多郎先生にも書いた。みんな長生きをしなくてはならぬと話し、先生にもそれを書いた。

品川にいる間に三木さんは、自分のゆく先がフィリピンであることを知った。たちまちスペイン語の勉強をはじめた。一ヵ月たって出発のころには大体わかったといっていた。徴用されてから満一年で以前と全然変らぬ顔で帰って来た。マニラでは出来るだけ図書館で暮したといっていた。おびただ

しいノートを作って来た。軍人の馬鹿さ加減、不真面目さ、徴用された仲間の文士たちの出鱈目さを話した。三木さんの戦争の見通しは、一年前より一層はっきりしていた。

そのころから、雑誌や新聞からも締出しをくった。日華事変の初期には、私なども腹を立てて突っかからずにはいられないような議論も書いた三木さんも、大体落ちついてもう騒がないぞというように冷静に成りゆきを眺め、自分の勉強をする三木さんになった。しかし雑誌などの馬鹿げた論文を見ると黙っていられないらしく、口角泡を飛ばす一面は相かわらずであった。「決戦につぐ決戦」とか、物量に恐れないというような説を痛罵した。人には言動をつつしみ用心しなくてはいけぬと真面目に忠告しながら、自分では「今から英語を一生懸命やっておかぬと間に合わぬぞ」など誰にでもわかることを大勢の前で平気で口にした。

防空壕が役立つようになった。三木さんは警報が鳴ると、いつでも逸早く飛込んだという。外に出るときには、人々と同じように防空頭巾と称する座布団のようなみじめなものを、肩にして歩いた。ねずみ色の戦闘帽をかぶるようになった。しかし国民服は作らず、巻ゲートルは最後までつけなかった。

「生きぬくということだけでも容易ではない。」「もうこうして始終会うのもじきに終るかもしれない。数年ののちに、やあ生きていたかとお互にいえれば幸福というものだ。」この二つの言葉を何回も三木さんは私にいった。とも角、長生きをして、自分の仕事をしなくてはならぬと絶えず考えていた。自分が弾圧され得るということも考え、不安がつきまとっていた。埼玉へ疎開したのは、食糧事情と空襲を避けるだけの理由ではなかった。

私が三木さんにはじめて会ったのは昭和二年であった。三木さんはその年三高の講師をやめて、法政大学の教授となるため上京したのだ。間もなく本郷菊坂の菊富士ホテルに宿っている三木さんを尋ね、すぐに親しくなった。毎週一度宛岩波書店へ来る三木さんは、主として私を相手にしていた。当時の私は仕事に熱中し、酒もよく飲んだ。夕方から友達と飲んでいて、酔ってくると、きまって三木さんに会いたくなる。三木さんは電話をかけると決して断らずすぐにやって来た。断るということが三木さんには出来ないのだ。こっちも勉強の邪魔をしてはいけないと思うのだが、酔うと自制力がなくなるのだ。それから散々飲んで夜更けの街を自動車を走らせて帰るのがきまりであった。私は徹底的に酔ってしまうのだが、三木さんは帰ってから、必ず勉強するといっていた。いかなることがあっても一日に二時間は必ず本を読む。このことは確かに実行されていた。酒を飲むだけでなく、ついに二人は遊里にも足を入れた。急ぎの仕事のある時は、三木さんは私のポケットへ札を黙って押し込んでおいて自分だけ帰った。そのころ、三木さんはすでに処女作「パスカルに於ける人間の研究」を出版していた。東京へ来てからは新しき哲学者として注目の的であった。

昭和三年の夏には満鉄の招聘をうけて講演にいった。その謝礼に貰った千五百円を基金として、秋から羽仁五郎と一緒に「新興科学の旗の下に」という雑誌を出した。岩波書店をやめて本屋をはじめた私が経営に従事した。このころは三木さんとはほとんど毎日会っていた。三木さんは相かわらず菊富士ホテルにいたし、私はつい近くの真砂町の下宿に泊っていた。羽仁さんと三人で毎日のように神

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

田や本郷の通りを並んで歩いた。そのころ三木さんのところへは若い訪客が多くなって来た。三木さんは自分の方から話さない人なので、尋ねて来た学生など固くなり、二人とも妙な工合になっている姿をたびたび目撃した。しかし私とは実によくしゃべり合った。毎日顔を合せ、長い時間一緒にいて、何をしゃべり合ったのか尽きることがなかったという記憶のみが残り、今はその内容を余り覚えていない。とも角私ははじめて尊敬し、しかも親しめる人に遭った喜びを毎日味わった。私の社会に対する眼を開いてくれたのは三木さんであった。

三木さんは、自分のことを話さない人だった。こちらからきけばいうが、よほどのことでないと相談もしなかった。昭和三年に喜美子夫人と婚約したことを私は知っていたが、三木さんはそれをいわなかった。私は喜美子夫人を、三木さんが識る前から知っていたのである。その性格は華やかでないから、三木さんのように沈鬱な面をもった人にはかえって不向きではないかと秘かに心配をしたこともあった。昭和四年の四月に三木さんは婚約中の東畑喜美子さんと結婚した。あとで三木さんは「私達の結婚式は淋しいものであった。その頃私は儀式的なことにおよそ興味が無かった」と自分で述べている。集まったのは東畑家の人たちが主で、友人として羽仁さんと私と他に一人が加わったのみであった。

結婚した三木さんは高円寺に新家庭を持った。それは後に防空壕を作った家の近くにある家であった。私はそこへも三日にあげず出かけていった。そのころ三木さんは原稿を書くために徹夜をすることがたびたびあった。そんな時喜美子夫人も別の室で起きているということであった。三木さんはそれを閉口して、私に話した。しかし恐らく、三木さんは夫人にはむっつりした顔で先に寝るように一

言二言すすめるだけであったと思う。時々家庭生活の煩わしさをこぼした。そういう種類の煩わしさを少しも諒解し得なかった私は無責任な言葉を放った。夫人について来た老女が家事の手伝いをしていたが、私が行くと引きとめて帰さなかった。頼むから一緒に食事をしてくれというのである。夫婦だけで食事をすると二人とも黙ったままで食事をしているということであった。私が加わってへらず口をたたくと二人とも笑い、食事は賑かになった。

三木さんが新家庭を持ってから間もなく「新興科学社」主催で講演会を開いたことがあった。その夜は初めから終りまで「中止」「中止」で満足な講演をした人はなかった。会が終ってから多勢で銀座でビールを飲み、新宿へ流れてまた飲んだ。そこで時間がきて追出されてからも数人の者は解散せず、自動車で三木さんの家へいった。夫人はわれわれの騒いでいるうち、もちろん起きていた。その時三木さんは、同座した東北生れの男に「みちのくのなつくさながしくさながしうてどもうてどもなつくさながし」という歌を短冊に書いて与えた。騒ぎ疲れて、もう帰ろうと皆で外へ出た。外は明るかった。私は思わず「いい月夜だなあ」と叫んだが、気がつくと朝になっていたのであった。中野の駅へ来ると省線電車が動いていた。三木さんがこの家から中野の宮前町という所へ移ったのは確か翌年のことと思う。「新興科学」は十三号でやめて、蔵原惟人・伊東三郎・小川信一などのやっていた「国際文化」と一緒になり、「プロレタリア科学」をはじめた。そしてその年の五月二十日に第一次のシンパサイザーの検挙があって三木さんも早朝に連れてゆかれた。

喜美子夫人との結婚をすすめられたとき、三木さんは「私の将来には、世間で普通に考へるやうな立身出世は望まれないかも知れない、寧ろ特殊な運命が私を待つてゐるやうに思ふが、それを承知の

上でよろしければ」と返事をしたと自分で書いている。この朝、三木さんは大変狼狽したと、連れにいった警視庁の特高が人に話したときいた。もちろん特高のいうことなどをそのまま信ずるわけではないが、そのころの三木さんにはまだそういう気配があったようにも思われる。その時は警察から一週間ばかりでいったん家へ帰ったが、七月になって起訴され、今度は豊多摩刑務所の未決監に入れられた。そして十一月半までそこにいたのである。

こんど帰って来てからは学校関係は全部よさせられたので、もっぱら書斎に籠った。そのころ書いたのが「歴史哲学」である。

三木さんが未決監にいる間に洋子さんが生まれた。父親の三木さんは洋子さんを無器用に可愛がった。赤ん坊をあやす時の顔や恰好は普段の三木さんに見られない独特のものであった。このころから喜美子夫人は良人を牛耳ることをすっかり会得してしまったように見受けられた。しかし牛耳るといっても聡明な夫人は決して世のいわゆる嬶天下になったわけではない。三木さんが無鉄砲になったり、人のいいために陥れられたり、無理を承知でもたのまれると断われぬようなことを防ぐ役目を忠実に果した。家庭の内部のことはもちろん、外部のことも安心して委せて置いたようである。三木さんが、家で声をあらげたり、怒ったりしていることを見たことがない。

「歴史哲学」を書いているうちは、他の原稿を書かず、生活も楽ではなかった。しかし夫人は辛抱し、三木さんを励まし、それが出版されたとき一番に喜んでくれた、と三木さんはそのころのことを書いている。「私達の生活には何となく落着きが生じ……家庭生活といふものが本当に始まつたといへるであらう。沈黙の生活が最も充実した生活であるといふことを彼女は真に理解してゐた」とつづけて

いる。

三木さんの家は、いつも静かであった。訪れると、原稿を書いているか、読書か、庭木の手入などをしていた。外へ出て来て、多くの人の中に大声で論じ、放言している時の三木さん、酒をのんで騒いでいる時の三木さんの姿とはまったく異なっていた。本来の三木さんは静かに勉強をしている時が一番幸福だったに違いない。ただ時々三木さんの中の野性的なものがあばれ出すことがあったのであろう。羽仁さんがハイデルベルクに一緒にいたころも三木さんは猛烈な勉強家であったが、時たま出鱈目の連中と騒ぎ出したと私に折々話した。未決から帰った時、また後になっても折々、三木さんは独房で本を読んでいるのは悪くない、釈放されたときはやれやれまたうるさい娑婆に出るのかと、うんざりした、といった。少しは誇張していると思うが、三木さんの或る種の心持はたしかにそうだったに違いない。しかし、とも角このころは夫人と子供の家に落ちついて幸福を感じていたのは事実である。

この喜美子夫人が、昭和十一年の八月六日に急に亡くなったのである。八月のはじめに、夫人が入院したときいて、私は家の方へ見舞いにいった。三木さんは独り家に暗い淋しい顔をしていた。病状をきいて帰りに夫人を見舞った。ひじょうに暑い日で、手術後の夫人は水を呑みたいと私に訴えた。容態ははなはだ重篤と認められた。私は帰っていって三木さんにいつもついているようにたのんだ。心配しながらも軽井沢へいった私は、翌日電報で夫人の死を報らされ急いで帰京した。夜になって高円寺の家へ着いた。三木さんは声をあげて泣いた。三木さんがこのような烈しい感情を表わすのをはじめて見た。

その後の三木さんは不自由な淋しい生活を送った。夫人をうしなった痛手は容易に医されぬようであったが口にはしなかった。洋子さんが三木さんに決してお母さんのことをいわなかったときいたが、二人にとって喜美子夫人の死は医すことの出来ない大きな痛手であったに違いない。この痛手を負った親子が、わびしく無器用に暮していた数年ののちに日華事変が始まった。三木さんにとって愈ゝ感心しない世の中になっていった。しかし活動家の三木さん、騒ぎも好きな三木さんは、いろいろのことをした。このころの三木さんは少し乱れていたように思われる。私との長いつき合いの中で、短い口喧嘩ではあるが二回まで烈しく衝突したのはこのころである。私は或る日、雑誌や新聞に物を書くことをやめて、一人で哲学講座を書くようにと熱心にすすめた。それは実現されなかったが、最近三木さんの日記を見ると「このことは真面目に考へねばならぬ」と書いてあった。三木さんは外からの影響を多分に受ける人であった。羽仁さんや私は三木さんのことを「いんきょ」と呼んでいたが、折折「いんきょ」を捨てて置くといけないぞと話し合った。ついでに書けば三木さんのことを、私たちはかげでミキセイと呼んだ。

数年の不自由な生活ののちに、喜美子夫人の母君のすすめる女性と再婚した。「洋子が好きなので、結婚しようかと思う」と私にはいった。三木さんは友人たちにも知人にもこれが新しい妻だとは紹介しなかったようだ。私は自分から「あなたが奥さんですか」ときき、三木さんの前で自己紹介をした。それが糸子夫人である。糸子夫人との生活も長くなかった。昭和十九年の三月夫人は肝臓癌で亡くなった。もう物資のひどく不自由になった中で、三木さんは千駄木町の日本医科大学病院に長く入院していた夫人に実によく尽した。終りにはずっと病院に泊り込んで、三木さんには安心して我儘をいう

夫人のいうことをきいていた。運命を素直にうける三木さんの姿が実によく現われていた。

三木さんは喜美子夫人追憶の文章の中に「この世の不幸に対して心を乱されないでゐることが出来た。彼女は寧ろ寂しさのうちに人生の真実を味はうとしてゐたともいへる」と書いている。これはそのまま三木さんへの言葉となるだろう。

三木さんがまだ菊富士ホテルにいたころである。冬の或る日いって見ると、火の気のない寒々とした北向きの室に寝ていた。風邪を引いたといっていた。朝飯も昼飯も食べていないという。私は腹を立て、宿の主婦を呼び、すぐに火を入れ湯気を立てること、食事をすぐ持って来ることを荒々しく命じた。やがて運ばれた親子丼と天丼を三木さんはペロリと平げて、腹がふくれたら元気が出たといって起きてしまった。

三木さんは大声で家人を呼んで用を命じるというようなことをしなかった。用事があると自分で立っていった。着物でも食物でも自分から選んだことはないようだった。人のしてくれることを黙ってうけ入れ満足していた。人と話をしている時にも、飯をたべている時にも、何か他のことを考えているような顔をしていた。冬の間股火鉢をして勉強し、たえず着物を焼いた。煙草の火をこぼし焼穴を作った。煙草はいつでもくわえていてぐちゃぐちゃにかんだ。一日に百本も吸った時期があった。中耳炎を患って繃帯をしながら煙草をやめられなかった。喜美子夫人が心配するので、私が「耳から煙を出す勿れ」と書いて、机の前に貼ったことがある。三木さんは自分の耳から本当に煙が出るのかと驚いて、妙な顔をした。

二人で京都へいったことがある。帰途、私は眼に石炭の塵を入れて、それがどうしても取れず、不

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com